

円通寺だより

平成 31 年 3 月
第 109 号



生まれてきた意味

今年の冬は積雪らしい積雪もなく、去年と比べると大変ありがたく楽な冬でした。身構えていた分少し拍子抜けしたほどでしたが雪かきの心配をせずに冬を終えることが出来ました。春がやってくるのもいつもより早いと感じましたが、そうなるとう度は夏の暑さが気になりなす。

つくづく人間とはわがままでやっかいな生き物だと感じました。

さて、最近の出来事のなかでも色々感じることはありましたが、とりわけ親の子供に対する虐待死はやりきれない悲しみに胸が痛みました。子供にとって、最も信頼し頼りとする親からの虐待は逃げ場のない苦しみであり、悲しみです。家庭の中でどのようなことが起きているか、他人からはなかなか察知することが出来ません。当事者の子供にしても、頼るべき親からの暴力を親以外の一体誰に訴える事が出来るでしょう。母親も父親からの暴力に支配されていて子供を守るどころか差し出すようなことをしていたようですから、外の間人が察知しない限り子供に逃げ場はなかったと言うことです。学校の先生に助けを求めたのに、結局父親の脅しに屈したのは、面倒なことに巻き込まれたくないという大人の身勝手さだと思います。なぜ血を分けた自分の子供を虐待するのか、どうしてそのようなことが出来るのか全く理解できませんが、そういう子供達を助けてあげられないことが残念でなりません。親子であるが故に今回の事件のように、最悪の事態にならないとなかなか実態が明るみに出ないと言う問題があります。

このような事件があると、人は何のために生まれてくるのかを考えさせら

れます。この親は、自分の子供を虐待するために生まれてきたのか、この子供は親に虐待されて死ぬために生まれてきたのかと。私自身は、誰でも何かしらの役割を持って生まれてきたはずで、この世に別れを告げるときに、生まれて良かった、生きて良かったと言うために今を生きていると思いたいです。私たちに出来ることは、難しいことですが、気配を察知できるようにできるだけアンテナを高くすることではないでしょうか。 合掌



「われらは善人にもあらず
賢人にもあらず」

わたしたちは善人でもなければ、賢者でもない。賢者というのは、立派で優れた人のことである。ところがわたしたちは、仏道に励む心もなく、ただ怠けおこたる心ばかりであり、心の内はいつもむなしくいつわり、飾り立て、へつらうばかりであって、真実の心がない我が身であると知らなければならぬ。自分自身がどのようなものであるかということを知り、それにしたがってよく考えなければならぬ。(唯信鈔文意の解説より)

私たちは、何かいいことをすると誰かに認めてもらいたい、褒められたいという気持が起こります。誰も見ていないところでいいことをしても張り合いがないと思ったことはないですか？そのような心が起こるのは煩悩であって、真実の心ではないというのです。表だって自分が立派で優れているような振る舞いや、善人であるようなそぶりを見せてはならない、なぜなら心の内に煩悩を備えているから「虚」(むなしい)、「仮」(かりの)ということで、真実ではないと教えて頂いています。

